

いろは茶屋で事故調を想う

中央区・城山支部 小田原良治
(西田橋有馬病院)

「人間というやつ、遊びながら働く生きものさ。善事をおこないつつ、知らぬうちに悪事をやってのける。悪事をはたらきつつ、知らず識らず善事をたのしむ。これが人間だわさ」。鬼平こと、長谷川平蔵の言葉である。夜中に役宅を抜け出して、いろは茶屋の妓に会いに行ったことから、怪我の功名を立てた木村忠吾にかけた言葉である。含蓄のある一節は、「谷中いろは茶屋」の巻にある。鬼平犯科帳のなかでも、私の好きな巻である。ちょっとぬけていて憎めない「兎忠」こと同心・木村忠吾のデビューである。遊び好きの忠吾が任務をさぼって遊んだことで、はからずも功名を立てるという鬼平犯科帳の物語パターンが出来上がる。忠吾は小悪事を行って大手柄を立てる。凶盗・墓火の秀五郎は、大悪党だが、いろは茶屋では温厚な紳士として善事を行っている。「いろは茶屋」の妓・お松に入れあげた忠吾は、凶盗とは夢にも思わず、「川越の旦那」こと「墓火の秀五郎」と意気投合し、馳走を受けて舞い上がる。お松から寝物語に聞いた川越の旦那（墓火の秀五郎）の言葉が、長官（おかしら）鬼の平蔵の言葉と瓜二つなのだ。池波正太郎は、凶盗・墓火の秀五郎に語らせている。「人間という生きものは、悪いことをしながら善いこともするし、人にきらわれることをしながら、いつもいつも人に好かれたいとおもっている...」と。人間の本質・二面性をサラッと口にした二人の男、火付け盗賊改め方長官・鬼の平蔵と凶盗・墓火の秀五郎。明と暗、白と黒、相対する微妙な色合い。この色合いのバランスが池波作品の味である。

池波正太郎は、随筆「銀座日記」のなかで

も、試写で見た重厚な映画の後味を「ああ、たまらないな」と述べ、「人間の世界は、『相対』の世界で『暗』もあれば『明』もある。『暗』を生かすためには『明』をも描かなければならぬ」のだと書いている。『明暗』二面があるからひとは救われる。『明暗』、『善悪』、『黑白』両者のバランスがなければ婆娑はつまらない。微妙な「色合いの変化」が大事なのである。

鬼平の厳しさと柔軟さのバランスは人を惹きつける。かつては「規則は厳格に、運用は緩やかに」あるべきだと学んだ。しかし、今、運用がいつの間にか規則をより厳しいものにしている現実がある。日本国憲法は個人の人权を謳いあげており、刑法も刑事訴訟法も、この人权を守るべく作られている。少なくとも、そのように理解してきた。しかし、現実の運用は必ずしもそうではないようであり、「人質司法」などと揶揄されている。規則は運用次第で異なった結果となる。運用が如何に大事かということである。

医療事故調査制度に目を転じれば、法令上、制度としては良い制度として出来上がった。しかし、運用を間違えれば、とんでもない結果を招来するおそれがある。医療事故調査報告書が紛争の具に使われた例も現実に発生している。医療関係者が運用に関与していると安心してはいけない。今、必要なのは、一人一人が医療事故調査制度を理解し、制度の運用を誤らないように注視して行くことであり、目の前の現実の対処を誤らぬことであろう。鬼平のような微妙な色合いのわかるスーパースターに期待することなどできない相談だから。